

# フィリピン共和国 バギオ市訪問 報告書

児童養護施設 あゆみ学園



平成 29 年 3 月 19 日(日)～平成 29 年 3 月 22 日(水)

訪問団：丑久保行紀(職員)

大野真梨子(職員)

S. I(中学 3 年生)

A. K(中学 3 年生)

## フィリピン共和国 バギオ市訪問 行程

3/19 (日)	学園出発(5:00)－成田空港着(7:00)－成田発(9:30)－マニラ着(13:50) 空港にてダコネス氏と合流(14:30)－車でバギオ市へ－軽食(17:00)－ ダコネス氏宅到着(22:00)－夕食(22:30 ダコネス氏宅にて)－ 就寝(24:00)
3/20 (月)	起床(6:30)－朝食(7:30 ダコネス氏宅にて)－出発(9:00)－小学校見学 (9:15)－織物工場見学(10:15)－Tam awan Village 見学(11:30)－ 昼食(13:30 ダコネス氏宅にて)－出発(14:45)－ストロベリーファーム 見学(15:15)－Wright Park 見学&乗馬体験、The Mansion 見学※フィ リピンの大統領が夏の間滞る建物(16:45)－Mines Park 散策&お 土産購入(17:30)－夕食(19:15 中華レストラン Mr.Ching Cuisine)－ 帰宅&自由時間(21:00)－就寝(23:00)
3/21 (火)	起床(6:30)－朝食(7:30 ダコネス氏宅にて)－出発(9:30)－BURNHAM LAKE 見学(9:45)－シティホール前にて記念撮影(10:30)－バギオ英霊追 悼碑見学(10:45)－軽食(11:45 Baguio Country Club 敷地内にて)－ SM ショッピングセンターにて買い物(13:15)－現地のマーケット散策 (14:30)－昼食(15:00 ダコネス氏宅にて)－出発(16:00)－ Child & Family Service House 見学(16:30)－現地のスーパーマーケッ ト散策(17:45)－夕食(19:15 韓国レストラン BATO BATO)－ 帰宅&就寝(21:45)
3/22 (水)	起床(3:00)－出発(4:00)－Teraoka Farm にてカルロス寺岡さんと会う (7:00 朝食も含む)－出発(8:20)－マニラ空港着(13:00)－マニラ (14:50)－成田(20:00)－学園着(23:00)

## 1. BONIFACIO ELEMENTARY SCHOOL 見学について

生徒 1000 名程、クラス 28、教師 30 名。8:00～9:10、9:30～10:40、11:00～11:30、ランチブレイクとして生徒は自宅へ昼食を食べに帰る～13:00、13:00～15:40、下校といった流れであり、科目数は 8 科目。フィリピンの公用語はタガログ語ではあるが地域によって言葉が違うようで、バギオ市はイロガノ語を使っている。そのため、地域で使われる言葉を学ぶ必要がある。また、英語も学んでいる



が、大人になると徐々に使わなくなってしまい、タガログ語を話すようになる(これについては、貧富の差が激しいフィリピンでは、良い仕事にありつけないと英語を話す機会が激減

するからとの理由である)。小学校には制服があったが、着用している子としていない子がいる。家庭の経済状況もある為、任意購入との事。小学校教育は無料。教師の給与は政府から。学校の経済には余裕がなく、支援などで成り立っている。故に満足にセメントを購入できず壁なども建てる事が出来ない。そのため、ペットボトルに家庭ごみ(ビニール類)を詰めて耐久性を出し、セメントと一緒に壁の一部としている。これにより、少量のセメントで壁を作れる。現在も随時作成中との事であった。



また、ダコネス氏が所属しているライオンズクラブが支援を行い、校舎を建てた事もあった。700 万ペソ(1400 万円程)かかった。ライオンズクラブはバギオ市内の 2 つの小学校に支援を行っている。定期的に、小学校に通っている生徒で、特に貧しい子どもを招待してご飯を食べさせる活動もしていると話があった。

校長先生の「学校内では貧富の差はなく、全ての生徒がイコールである」という言葉が印象的な学校見学であった。



## 2. CHILD & FAMILY SERVICE HOUSE 見学について

当初は見学の予定はなかった。バギオ市内観光中、偶然にもオーナーと出会い、ダコネス氏と知り合いだったことから見学が実現した。

この施設は、家族支援・自立支援・児童養護が一体となっている複合施設のようなイメージである。23名の女の子が生活している。その内、7名が児童養護の対象となっている。この施設で生活している大半が性的虐待(親族から、またはクラスメイトからのレイプ)であるとの事。フィリピンには一時保護機能を持った機関もあるようだが、一時保護期間は4～5日とごくわずかであり、対応としては



不十分である。また、バギオ市には他に乳児施設がある。政府からの資金をもとに運営されている。

建物内は非常にキレイであり、子どもの部屋も整理されていた。それぞれ、個室や複数人の部屋の構造となっており、食堂もキッチンもある。イメージ的にはグループホームの様であった。



### 3. ホームステイについて

現地の滞在先は、ダコネス氏宅であった。とてもキレイな家であり快適に過ごす事ができた。実は、私たちが滞在した建物は、カルロス寺岡さん宅であった。寺岡さんは現在別の地域に住んでいる。加えて、ダコネス氏の奥様の従妹夫妻も一緒に滞在。



子ども達にとっては初めての体験であった。勝手の違いや、日本とは異なる香りなども感じる事ができた。勝手が違う分、こちらの要望を相手に伝えるためにも英語が必要となってくる訳で、そうした会話にもチャレンジする必要があった。ホームステイというのは常に英語を使うチャンスがある。現地の方たちと触れ合う事に関しては、非常に有意義な時間である。ダコネス氏、奥様は好意的であり、なるべく子ども達が英語を使える、コミュニケーションをとれる機会を作ってくれた。そのため、子ども達も自ら英語を使い会話をする、もっと英語を知りたいという気持ちが湧いてきたようにも思えた。また、ダコネス氏宅で提供された料理(朝食、昼食)は家庭的であり、非常に美味しかった。子ども達は、渡



航前に「食事が合わなかったらどうしよう」と心配していたが、見事に払拭してくれるものであった。これは、なるべく日本人に合う味付けをしてくれたダコネス氏側の配慮であったと感じる。

その結果、4日間を一緒に過ごしてくれたダコネス夫妻との別れ際には、感傷的になる場面もあり、濃い時間を過ごす事が出来た事を物語っていた。

### 4. 感想

現地では、日本語が通じず英語での会話であったため、伝えられない、伝わらない事は多々あった。しかしながら、それを臆せず英語を喋ろうとする意志があれば何とでもなると考える。また、現地の方たちはとても親切であり、こちらの英語が不十分であろうとも、カタコトであろうとも、聞こうと理解しようとしてくれる。そのため、頑張って伝えようとする姿勢を見せれば、おのずとコミュニケーションがとれるのである。相手に伝えようとする姿勢、相手を理解しようとする姿勢の本質ではないだろうか。相手の事を知る

ために、相手に自分の事を伝えるためにコミュニケーションを図る。人種、宗教、国、言葉など違えども、気持ちが重要であると再認識できた時間であった。

また、子ども達にとっても非常に大きな経験であったと思う。極端に言えば、水を買うのにも苦勞する。言葉が通じない、日本の当たり前が通じないからである。しかし、そのような環境の中で過ごす事ができた、日本にいたら出来ない経験をしたからこそ、得たものはきっとあったと思う。出国前と帰国



した後では、表情が違っていた。自身に溢れた、充実した顔をしていた。

このような経験が出来た事は、彼女たちにとって大きな糧となり、これからの将来にきっと役に立つものであると思う。今回だけでなく、これからの子ども達にもこのような経験が出来るよう考えていきたい。

## 5. 子ども、引率職員の感想

### 「フィリピンで過ごした思い出」

中3 A.K

私は3月19日から22日の3泊4日をフィリピンでホームステイをしました。初めて外国に行くわけではなかったけれど、ホテルではなく違う国の人の家に泊まることは初めてだった為、不安と楽しさでいっぱいになりました。19日の朝4時に起きて成田空港に出発する時に、副園長先生と須永さんと井上さんが見送りをしてくれて、フィリピンで一つでも多く学びたいという思いが強くなりました。沢山の人が「楽しんできてね。」と声を掛けてくれたので、4日間悔いのないように過ごそうと思いました。

フィリピンのマニラ空港に着くと、レイさんとアナベラさんが待っていて、私たちを優しく受け入れてくれました。丑久保さんと大野さんと学園で英会話の練習をした時のことを思い出して、緊張しながらも自己紹介をしました。4日間、ロイさんという方が運転をしてくれました。

バギオ市では、ずっと車で移動していた為、眠い中運転をしてくれたロイさんには、感謝

の気持ちでいっぱいです。初日の夕食は、ライスとお肉とトマトやきゅうりなどのサラダが出ました。フィリピンのお米は、日本のお米よりも細長くて少し臭みがありました。夕食の後はお風呂に入ったりトランプをして遊んだり自由な時間でした。お風呂はお湯が急に水に変わって、冷たい水で3日間入りました。フィリピンは水事情が悪く、日本がどれだけ恵まれているのかを改めて考えさせられました。

2日目は、バギオ市の小学校に行きました。5,6年生の授業の様子を見学しました。星座の勉強をしていて、日本と同じ理科の内容で驚きました。学校の校舎の壁や通路を直すお金がない為、1.5リットルのペットボトルに生徒やその保護者が千切ったお菓子の袋を詰めて頑丈にしたものをコンクリートと一緒に埋め込んだりしていました。一方でマニラはビルなどの高い建物が沢山並んでおり、フィリピンの経済格差が大きいと分かりました。授業の休み時間には沢山の子どもたちが集まってきてくれて、写真を撮ったり少しお話をしました。「マーブーハイ！」は日本でいう『乾杯』というような意味があるようですが、「マーブーハイ！」と元気よく挨拶する姿を見て、私たちが見学に来たことを嬉しそうにしているようでした。

フィリピンの方々には優しい方が多く、日本人と分かると日本語で話しかけてくれたり、沢山の笑顔をもらいました。レイさん家族には韓国料理や中華料理のお店に連れて行ってもらったり、ストロベリーフェスティバルにも連れて行ってもらいました。ストロベリーアイスがとても美味しく、お土産選びも楽しかったです。レイさんからハイビスカスのTシャツと小銭入れをプレゼントにももらいました。

レイさん家族と過ごした4日間をこれからの私の人生に生かしていきたいと思いました。このような機会があって本当に本当に良かったです。そして感謝の気持ちでいっぱいです。

## 「初めての海外生活」

中3 S.I

私は、フィリピンのバギオ市に行って感じたことが沢山あります。

一つ目は、バギオの人はとても優しいということです。私は初めて外国に行くということもあり、不安でいっぱいでした。しかし、いざ行ってみるとバギオの人は優しく、目が合うとニコッと微笑んでくれたり、ダコネスさんたちも私の片言の英語にも理解しようとしてくれて、とても嬉しかったです。アナベラさんは私にタガログ語の挨拶を教えてくださいました。タガログ語の挨拶をメモして、朝に「マガンダンオマガ！」と言えるように必死に覚えめました。今でもタガログ語の挨拶は覚えています。

2つ目は、日本との違いです。驚いたことはトイレです。日本はトイレットペーパーを流しますが、フィリピンはゴミ箱に捨てます。日本では流すことが当たり前だった為、勢い余

って流してしまったことが何度かありました。レバーで流しても水の勢いが弱い為、なかなか流れず大変でした。次に食事場面では、日本は箸を使って食事を食べますが、バギオの人はスプーンとフォークを使います。スプーンとフォークを上手にを使って食べ物を切っていることに驚きました。他には、お風呂のシャワーの出が悪いことです。日本では当たり前のようにシャワーを使ってお湯で体を洗いますが、フィリピンは最初にお湯が出ていても途中から水が変わってしまい、私は震えながら入りました。初めてお風呂が辛いと思いました。あとは道路の違いです。マニラ空港からバギオ市のダコネスさんの家まで 5 時間以上かかりました。日本の道路はきれいに整備されていてあまり揺れることはありません。マニラ空港から離れるほど砂利の道もあり、お尻が痛くなりました。

最後に、出発前は不安でいっぱいに行きたくなかったけれど、実際に行ってみると帰りたくない気持ちに変わりました。それはバギオの人とダコネスさんたちのおかげです。機会があればまたフィリピンのバギオに行って、ダコネスさんたちと沢山話したいです。その為に英語とタガログ語の勉強を頑張ります。

## 「バギオ市訪問について」

大野 真梨子

海外に子どもたちと一緒にいくこと自体が初めての経験であり、子ども達と同様に無事に行程を終えられるかが不安であった。英語は学生以来触れる機会もなく、会話をするには殆ど出来ない為尚更であった。英語での会話が全く出来ない私にとって、子ども達に説明することも出来ず、もどかしさも多かった。同じく引率した当園の職員の通訳や発する空気感により成立した部分が非常に大きい。

4 日間の滞在期間中、お世話になったレイ・ダコネスさんをはじめ、奥様や従妹夫妻に本当に親切にして頂き、多くの経験をさせて貰った。マニラ空港からバギオまでの移動距離、移動時間が非常に長く大変であったが嫌な顔を一つせず、皆さんの笑顔が強く印象に残っている。食文化や水事情、交通事情や経済状況等、日本との違いを感じる場面が多々あった。そんな中、食事時間の会話が多く、会話の内容の理解度は低くとも笑いの絶えない食事場面であった。日常的な姿なのか、配慮してコミュニケーションをとる時間を私たちの為に確保してくれていたのかもしれないと思うと、もっと積極的にいくべきであったと少しの後悔が残っている。

小学校の見学や施設見学等を通して、フィリピンの国事情をまざまざと見せつけられた。経済格差による制服の任意購入、空のペットボトルにお菓子等のビニールゴミを細かく切り刻んだ物を詰め込み、強度を増した上でコンクリート塀に埋め込む、資金が入る度に塀を繋げていく状況を知り驚いた。偶然にも児童施設の見学に行く機会を頂いたが、入所理由の



大半は性的虐待という事実に衝撃を受けた。

中学 3 年生 2 名の性格はもちろん異なる為、出発前のモチベーションも二人とも逆のものであった。事前に英会話の練習時間を設けたが、一人は不安が大きく参加することが出来なかった。到着後、徐々にコミュニケーションを取ろうとする姿勢が二人にも出てきて安心した。時折ふざけが過ぎることもあったが、全ての行程に参加し、食事も「美味しい」と話しながら、普段よりも沢山食べていた。見るものが新鮮であり、文化の違いに四苦八苦する姿は印象的であった。帰国し施設に到着した時の第一声が「楽しかった」は忘れないと思う。施設での生活が今後続いていく中で、自ら積極的に外の世界に興味を持ち、行動に移すことはとても勇気の要ることであり、そこまで至らない場合もあるかと思う。今回の訪問をきっかけに感じたことを無駄にせず、将来の為に役立てて欲しい。

最後に、ここに至るまでに多くの方々の準備と支援があったからこそ成功した為、感謝の気持ちを述べたいと思う。有難うございました。